

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520057  
 研究課題名（和文） 植民地期朝鮮における檀君系教団の分裂・提携・統合運動に関する研究  
 研究課題名（英文） A Study on Division, Cooperation and Combination of Dangun Religious Organizations in Colonial Korea  
 研究代表者  
 佐々 充昭（SASSA MITSUAKI）  
 立命館大学・文学部・教授  
 研究者番号：50411137

**研究成果の概要：**日本帝国主義による植民地支配が進行した 20 世紀初頭の朝鮮において、古朝鮮の開国始祖「檀君」を精神的求心点として民族独立を図ろうとする運動が勃興した。この民族主義運動を担ったのが、1909 年 1 月に創教された檀君教（後に大倭教と改称）である。本研究では、日本植民地下で活動した檀君系教団の分裂・提携・統合運動について分析しながら、檀君民族主義運動の形成・発展過程について明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,500,000	0	1,500,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：宗教学・東洋史

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：檀君、檀君教、大倭教、朝鮮新宗教、ナショナリズム、植民地主義

### 1. 研究開始当初の背景

戦後の朝鮮史研究においては、戦前の日本人研究者が行った他律性・停滞史観の克服から、朝鮮史に対する自律的・内在的な理解をめざす研究が志向された。特に、朝鮮近代史の流れに関しては、「侵略と抵抗」という二項対立的な観点から、帝国主義国として侵略的膨脹を企てた日本が、朝鮮の内在的な近代化への動きを阻害していく過程と見なす傾向が強かった。

しかし、1990 年代後半以降、「植民地近代（colonial modernity）」に関する研究成果が数多く発表されている。「帝国」の規律権力によるヘゲモニー支配の中で、朝鮮の被支

配民衆は常に協力しては抵抗するという両面的な様を見せたという観点から、「日常的抵抗」と「対日協力」とが入り交じり合う「植民地認識の灰色地帯」という視点などが示されている。

また、近年の国民国家に関する研究においても、「侵略と抵抗」という対抗関係の下に展開した東アジア各国における近代的国家創出の営みが、その一方で深い影響関係を持ったものであったことが指摘されている。近年の研究成果によると、「民族」という概念は近代の所産であり、民族主義言説それ自体が、帝国と被支配国の植民地支配構造の中で親密に織りなされて形成・発展させられたも

のであるとされる。朝鮮史の自律的發展を析出しようとする従来の朝鮮史研究の枠組みは、「民族」をアプリオリなものとして本質主義的に想定することを前提しているという点で、批判の対象となっている。

本研究では、近年の朝鮮史研究に関する研究成果のうち、特に「民族主義」と「植民地近代」をめぐる議論を批判的に検討しながら、朝鮮の檀君系教団における分裂・提携・統合運動を、単に一国史の問題としてではなく、広く「東アジア」における近代ナショナリズムの相互関連性の観点から究明を試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近代以降に登場した朝鮮新宗教の中で、特に檀君系教団の活動実態について明らかにする点にある。

檀君教とは、古朝鮮の開国始祖「檀君」を信奉する教団として、1909年1月愛国志士羅喆により創設された。韓国併合後、檀君教は総督府の取締りを避けるために、1910年に教団名を大倭教と改称した。その際、教名変更に対抗した一派が分立し、檀君教をそのまま名乗った。その後、大倭教は抗日主義を掲げ、1914年に中国領内に総本司(本部)を移転した。一方、檀君教は、総督府に迎合する態度をとり、親日色を強めていった。こうして、植民地期朝鮮における檀君系教団は、中国領内に活動拠点を移した抗日的な大倭教と、国内に残存した親日的な檀君教の二大教団を中心に活動が展開された。大倭教は、一連の檀君ナショナリズム言説を体系的に創出していった一方で、檀君教は、親日貴族を信徒に迎え入れ、朝鮮宗教界の親日化に努めた。また、大倭教と檀君教ともに、単に朝鮮国内だけでなく、他の東アジア諸国(日本や中国)の宗教団体との提携・連合を繰り返した。

本研究では、大倭教と檀君教を二大基軸として展開された檀君系教団の分裂・提携・統合運動に関する実態、およびその原因分析について考察しながら、朝鮮の檀君系教団のもつ特質について総合的な把握を試みる。

## 3. 研究の方法

本研究では、次の四つの時期、1905～1910年(愛国啓蒙運動期から韓国併合を経て檀君教が分裂するまで)、1910～1919年(檀君教の分裂後から三・一独立運動まで)、1920～1930年(文化政治期)、1931～1936年(満州事変後から類似宗教弾圧が行われるまで)の時期に区分して研究を行う。

本研究は、関連教団に関する史料の収集とその読解・分析を主たる作業とし、現存する檀君系教団に所属する信徒たちからのインタビューで文献調査の内容を補足するという手法をとる。なお、文献研究においては、新宗教研究の分野で注目されているライフ・ヒストリー法を援用して、各教団信徒の

生活状況や交遊関係などを詳細に分析しながら、檀君系教団の活動実態について考察する。各教団に所属する信徒個人単位のミクロな宗教史学的研究によって、「帝国/植民地」の二律背反的な構造的に支配された植民地期朝鮮人たちのハイブリッドなアイデンティティの在り方を析出すると同時に、従来の政治史・経済史中心の朝鮮近代史研究では明らかに出来なかった、植民地期朝鮮の文化的・社会的状況を、「植民地近代」という観点から具体的な形で明らかにする。

4. 研究成果(本研究において以下のことを明らかにした。)

### (1) 韓末における檀君ナショナリズムの勃興

1905年の乙巳条約保護条約締結後、朝鮮では愛国啓蒙運動と呼ばれる国権回復運動が展開された。この時期(1905～1910)、実力養成の一環として近代西洋思想の受容が積極的に行われたが、主に日本明治期の近代思想と中国変法思想家(康有為や梁啓超など)の書籍を通じて間接的な受容が行われた。『皇城新聞』『大韓毎日申報』などの新聞や、各種の学会雑誌を通じて、近代的な「民族/国民 nation」や「民族主義 nationalism」概念が受容され、朝鮮民族主義の立ち上げが唱導されたが、それは日本的に変形された「日本民族主義」の敵対的鏡像物(相似物)として創出されたものであった。「日本魂(大和魂)」にならって、朝鮮でも「朝鮮魂(大韓精神)」が唱導され、やがて天皇を中心とする国体思想に対抗するために「檀君の子孫意識(檀君国体思想)」が訴えられた。このような民族主義の高揚の中から、檀君ナショナリズムが勃興していった。

檀君ナショナリズムの創出において最も重要な役割を果たしたのが、当時『大韓毎日申報』の主筆をつとめていた申采浩である。申采浩は、梁啓超の中国語論説を通じて、日本の政教社を中心に提唱された「国粹保存主義」を知り、それを朝鮮語に翻訳して、朝鮮における「国粹保存主義」を訴えた。また、彼は、同紙に「読史新論」(1908年)を発表し、朝鮮愛国主義にもとづく新たな歴史観を唱導した。日露戦争に勝利した日本が朝鮮の権益を手中に収めた当時の国際情勢において、列強の関心は満州へ集中していた。朝鮮においても、満州に対する関心が高まっていたが、申采浩は「読史新論」を通じて、朝鮮の開国始祖である檀君の存在を強調し、檀君の血統を継承する扶余・高句麗が満州で活躍したことを根拠に、「満州・朝鮮一体史観」を主張した。この大朝鮮主義史観は、朝鮮の知識人エリートたちを中心に広く受け入れられていった。

### (2) 儒教改革運動の挫折と檀君教の「重光」

朝鮮時代においては、儒教（朱子学）が王朝支配を正当化する正統教学として採用され、民衆の日常生活すべてを規範化する絶対的コスモロジーとして機能した。しかし、19世紀末の開化期以降、近代西洋思想が流入し、1895年の甲午改革を契機に近代的な国民国家形成が試みられた。その際、西洋の「宗教（religion）」概念の受容により、絶対的なコスモロジーとして機能した儒教を一つの宗教（信念体系）として相対化する作業が行われた。中国の西学書を通じて近代思想を吸収した改新儒林（進歩的儒学者）の中には、儒教を朝鮮の「国教」に認定して国民国家の統合原理にしようとする議論も行われた。

愛国啓蒙運動期になると、改新儒林の中から、近代的な宗教組織として再編された儒教団体を通じて、国権回復のための民族統合を図っていくという運動が展開された。この運動を主導した人物が朴殷植であった。朴殷植は、1909年に「儒教求新論」を発表し、ルターによる宗教改革（Reformation）になぞらえながら儒教の近代的改革を訴え、同年に大同教という儒教団体を組織した。大同教の目的は、儒教をもとに国民統合を図ろうとするものであったが、それは清末の変法思想家である康有為の近代孔教運動の影響を受けたものであった。これが契機となって、朝鮮では改新儒林たちを中心に近代的儒教団体が多数創設された。しかし、大東学会（後に孔子教と改称）などの親日儒教団体の抵抗や、地方の保守儒林たちの反発にあい、この儒教改革運動は失敗に終わった。

それと同時期に、朝鮮民族の始祖である「檀君」を唯一絶対の主宰神として崇拝する宗教教団が創設された。1909年旧1月羅喆によって創立された檀君教がそれである。羅喆によると、檀君が太白山に降臨した際に人類を教化するための神教（即ち檀君教）が立教されたが、高麗元宗の時代に蒙古の侵略を受けてその教統はいったん途絶えてしまったとされた。そして、自らの檀君教創立を、蒙古侵入以来約七百年間断絶していた檀君神教の復活であるとして「重光」と称した。しかし、羅喆は愛国啓蒙団体の一つである湖南学会に所属しながら国権回復運動に尽力した改新儒林であり、実のところ、檀君教の創設も朝鮮民族独立という政治的な目的をもって行われたものであった。実際、檀君教には、羅喆の周辺にいた愛国啓蒙運動家や独立運動家たちが大挙して入教したが、その中には、開化期の儒教国教化運動や愛国啓蒙運動期の儒教革新運動に挫折した改新儒林たちが多数含まれていた。檀君教の信徒の大多数が儒林（儒学者）たちであったために、その後に分派・派生した檀君系教団は、みな儒教的な性格を強く帯びるようになった。

### （3）大倭教による抗日民族独立運動の展開

1910年の韓国併合後、檀君教は総督府の取締りを避けるために教団名を「大倭教」に改称した。大倭教は、総督府の監視と弾圧を避けるために、1914年に教団本部を中国領内（東北地方）に移転した。1916年には初代教主羅喆が植民地支配の不当性を訴えて、檀君信仰の聖地である九月山三聖祠で自害した。その後、慶州金氏の名門両班として奎章閣副提学をつとめた経歴をもつ金教献が第二代教主に就任した。彼を中心に、『三一神誥』『会三経』『神理大全』などの根本教典の他、『神檀実記』や『神檀民史』などの檀君歴史書が整備された。また、後に第三代教主となる尹世復は、私財を投じて北間島に東昌学校という民族学校を設立した。檀君ナショナリズム創出に大きな役割を果たした申采浩や朴殷植は、韓国併合後に中国に亡命して大倭教に入信し、尹世復のもとに寄宿しながら東昌学校で国史（朝鮮史）を教授した。彼らは、古代東北アジアの部族・民族のすべてが「檀君の子孫」であるという観点から、これを朝鮮古語にちなんで「倍達民族」と名付け、満州全域を含む大朝鮮史観を唱導していった。

また、韓国併合後、大倭教は、大物独立運動家を多数迎え入れ、中国東北地方における抗日独立運動の拠点の一つとなった。1920年に金佐鎮將軍主導下で戦われた青山里戦闘（1920年）は、日本正規軍に勝利した唯一とも言える戦闘として現在の韓国歴史教科書に掲載されるほどであるが、この戦いも大倭教幹部の徐一が中心となった組織した北路軍政署によるものであり、金佐鎮將軍も大倭教信徒であった。

1919年9月に上海を拠点として大韓民国臨時政府（以下、臨政と略称）が樹立された。当時の上海には、初代教主羅喆の命を受けて大倭教徒の申圭植が派遣され、民族独立運動の基盤をつくっていた。中国語に堪能であった申圭植は、孫文ら中国革命派人士たちと交流しながら、中国国民党と信頼関係を築いた。申圭植は1910年代の上海において、同済社という扶助団体を組織し、博達学院という教育機関を設立した。臨政が上海の地に樹立されたのも、申圭植ら大倭教徒たちの活動の結果であり、実際、臨政の要職には大倭教幹部たちが多数参画した。このように、大倭教が臨政の重要な背後支援団体であったために、「半万年の歴史意識」「開天節」「檀君紀元」「白頭山の民族聖山観念」「倍達族による満州故土史観（大朝鮮史観）」などの檀君ナショナリズム言説が、臨政運動を通じて朝鮮独立運動家たちの間に広く流布していった。

また、上海の大倭教西道本司に所属していた朴殷植は、当時香港近辺に滞在していた康有為と接触を持った。その他、中国領内に亡命した大倭教徒たちは、康有為に直接師事し

た孔教徒の李炳憲や、韓人孔教会を組織した李承熙らと交遊関係を結び、特に満州地方においては大倭教徒と孔教徒が連合する動きも見られた。

#### (4) 朝鮮国内における檀君教の布教活動

1910年に大倭教から分派した一派は、鄭薫模を教主として檀君教をそのまま名乗った。檀君教は親日貴族らを信徒に迎え入れて、朝鮮総督府の宗教政策に迎合しながら布教活動を行った。信徒の大多数が儒学者であった檀君教は、植民地支配下という時代状況の中で、「檀君固有神教」の要素を払拭し、儒教的な色彩を強めていった。

日韓併合の直前である1909年7月に神宮奉敬会なる団体が設立された。この団体は、日本の国祖天照大御神と朝鮮の国祖檀君とを奉斎することによって日鮮融和を図ろうとした親日団体であった。1910年の韓国併合によりこの団体は解散するが、この神宮会に参加していた親日貴族たちが、檀君を信奉する国内唯一の宗教団体として、檀君教にそのまま入信していった。

また、檀君教には、侍天教の信徒たちが多数入信していった。黒龍会の指導者である内田良平は、三・一運動による民族独立気運を払拭するために、名ばかりの朝鮮内政を訴える親日団体として1921年に同光会を組織した。内田良平は、侍天教徒たちの人脈を使って檀君教の教主鄭薫模に接近し、朝鮮内政独立運動に檀君教徒たちを加担させた。

明月館などの高級料亭の経営で財をなした資産家の安淳煥は、1930年に鹿洞書院を設立し、これを母体として1932年に朝鮮儒教会という全国的な儒教機関を設立した。安淳煥は、鄭薫模に接触して檀君教の本部を鹿洞書院内に設置した。こうして、檀君教と朝鮮儒教会は提携関係を結んだ。朝鮮儒教会は、日本の代表的儒教団体である斯文会や中国曲阜の孔子聖廟府及び「満州国」の孔学会など東アジアの儒教団体と交流を深めた。しかし、それは、大アジア主義思想を流布拡散させるために日満中朝（日本・満州国・中国・朝鮮）の東アジア連合を推進しようとした、日本の斯文会を中心に画策されたものであった。そのために、朝鮮儒教会と提携した檀君教では、日本の大アジア主義思想と檀君ナショナリズムを融合させた歴史説が唱導された。また、大アジア主義思想にもとづいて、東北アジア民族の一大団結を説く『揆園史話』などの偽書類が鹿洞書院・檀君教本部で創作された。

#### (5) 檀君教と道院・世界紅卍字会との提携

1922年に中国山東省において道院・世界紅卍字会という道教系の新宗教団体が創設された。この団体は中国全土に爆発的な発展を見せたが、特に満州軍閥の張作霖・張学良父

子の帰依により東北地方を中心に勢力を拡大した。また、この団体は1920年代後半から日本の大本教と提携関係を結んだ。当時、大本教を主導したカリスマの指導者の出口王仁三郎は、道院・世界紅卍字会との提携を通じて中国大陸進出の足掛かりを得ようとしたのである。また、両教団提携の背後には、満州国の独立を宗教的に支援しようとした玄洋社の頭山満と黒龍会の内田良平が存在した。

その後、朝鮮においても、1935年に朝鮮道院が設立された。朝鮮道院には、出口王仁三郎や内田良平のもつ人脈により、侍天教や普天教（甌山教系）の信徒が加入した。また、朝鮮道院は尹徳栄なる人物によって主導された。尹徳栄は、李王室の外戚長として韓国併合時に子爵を授与された後、総督府中樞院の顧問や副議長を歴任した親日貴族であった。彼は朝鮮に設立された各種の親日儒教団体の責任者をつとめた他、1920年代頃から大倭教南道本司に経済的援助を行うなど、朝鮮の儒教系・檀君系教団と深い繋がりをもっていた。こうして、大倭教南道本司・檀君教・朝鮮儒教会などの檀君系団体に所属した人士たちが、大挙して朝鮮道院へ加入していったのである。

当時の日本では、中国大陸へ侵攻するために、日本と大陸との中継地点である朝鮮の重要性が強調され、「内鮮一体」「鮮満一如」のスローガンのもとに、日本・朝鮮・満州間の連結強化が叫ばれた。中国の道院・世界紅卍字会、日本の大本教、朝鮮の新宗教教団という東アジア三国の宗教連合運動は、帝国主義による日本勢力の中国大陸進出政策を宗教的側面から後押しするものであったと言える。

#### (6) 朝鮮国内における大倭教南道本司の活動

1914年に大倭教総本司（本部）が中国領内に移転された後、朝鮮国内には南道本司という支部がつけられた。1910年代の武断統治期において、大倭教南道本司は表立った布教活動を行えなかった。しかし、1920年代に入ると、齋藤総督による文化政治のもとで布教活動を再開した。

1920年代以降において注目されるのは、『東亜日報』が全面的に南道本司の活動を支えたことである。それは、南道本司を主導した大倭教幹部の柳瑾の力による。柳瑾は、かつて『皇城新聞』の社長をつとめたこともある言論界の重鎮であり、資本家金性洙（東亜日報社長）の信頼を得て、1920年『東亜日報』の設立に関わった。柳瑾は、同新聞の編集監督をつとめ、「東亜日報」という社名も柳瑾が提案したとされる。1920年の創刊当初から、『東亜日報』紙上では、檀君や大倭教に関する記事が多数掲載された。1920年代初めには、

大倭教信徒である国文学者の権恵圭によって、檀君が降臨した民族聖山として白頭山を称揚するキャンペーンが展開された。また、1930年代には、玄鎮健が檀君遺跡を巡る連載記事（「檀君聖跡巡礼」）を発表した。これにより、「妙香山（檀君窟）」、「九月山三聖祠」「檀君陵」「江華島摩尼山祭天壇」「鹿児島県檀君神社」など檀君関連史跡の状況が広く知られることになった。

また、東亜日報社は、1932年に平安道江東郡の有志一同によって計画された檀君墓の修復事業を全面的に支援し、連載記事を掲載しながら「檀君陵修築期成会」の発足を促した。この事業は1936年春に終了し、檀君陵祭などが挙行された。これに関して、北朝鮮では、1993年に檀君の墳墓を発掘し、今から五千年前の檀君とその妻の遺骨が発見されたと発表した。北朝鮮は、国家的事業としてこれを檀君陵として復元し、翌1994年に完成させた。北朝鮮側の報告書によると、「墓の前には1936年に檀君陵修築期成会が有志から集めた基金で設置した墓域施設がある」と記されていることから、北朝鮮が発見した檀君墓は、平安道江東県の檀君墓と同一のものであったことが分かる。

また、大倭教南道本司は、1928年に総合雑誌『ハンピツ（偉大な光）』を刊行した。それには崔南善・文一平・崔鉉培・李能和・李丙燾など当時を代表する朝鮮人学者たちが記事を寄稿した。この事実より、植民地期朝鮮で文化ナショナリズムを主導した朝鮮人学者たちが、大倭教南道本司と深い関係をもっていたことがわかる。

#### （7）1930年代における朝鮮国学運動の展開

1920年代に総督府は朝鮮史編修会を設置し、朝鮮半島史編纂事業を開始した（1938年に『朝鮮史』35冊を刊行して終了）。この編纂事業で、日本人学者たちは実証主義の観点から檀君の存在を否定し、古朝鮮の項目を削除した。これに反発した朝鮮人学者たちは、歴史学以外の学問、すなわち当時「帝国日本」を通じて流入してきた民俗学・人類学・宗教学などの新種の学問を用いて、檀君古朝鮮の存在を証明しようとした。

朝鮮史編纂会に参画した崔南善や李能和らは、大倭教流の檀君ナショナリズムに賛同し、「檀君神教」の名の下に古代朝鮮の神話・古俗の研究を行った。崔南善は1910年代から、朝鮮光文会や新文館の出版事業を通じて、金教献などの大倭教人士らと交流を深め、1920年代からは檀君を前面に打ち立てた檀君国学運動を展開し、檀君ナショナリズムを主導する中心人物となっていた。李能和は、朝鮮の宗教に関する研究で大きな成果を挙げ、「朝鮮宗教学の父」と称されるが、崔南善と同様に大倭教徒たちと接触し、「檀君神

教」を朝鮮宗教の根源と見なす立場から宗教・民俗研究を行った。

1930年代に入ると「朝鮮学」運動が起こった。この運動は、崔南善をはじめ、鄭寅普、安在鴻、文一平、安廓などを中心に朝鮮人主体の学術復興運動として展開された。朝鮮学を主導した人物のうち、安在鴻と鄭寅普は1910年代に大倭教に入信した信徒であり、特に申采浩の民族主義歴史学から絶大な影響を受けていた。また、文一平や安廓も、大倭教流の檀君ナショナリズム思想から大きな影響を受けていた。

朝鮮語研究者の中にも大倭教信徒が数多くいた。植民地期の朝鮮語研究は、正音派（機関誌『正音』に集った表音主義者グループ）とハングル派（機関誌『ハングル』に集った表意主義者グループ）とに分かれていた。前者はキリスト教聖書の正書法であったのに対して、後者は韓末に朝鮮語学を立ち上げた周時経の学統を継承するものであった。周時経が大倭教信徒だったことから、崔鉉培、李克魯、崔鉉培、金斗奉などハングル派学者の多くは大倭教に入信していた。ハングル派は後に「朝鮮語学会事件」（1942年）で治安維持法違反容疑者を多数出したが、この事件は満州国にあった大倭教本部の検挙と連動して行われた。

#### （8）解放後の韓国における檀君ナショナリズム言説の定着

大韓民国臨時政府は、指導者間の対立などによって1925年頃には有名無実化した。1925年から解放まで、臨政を主導したのは韓国独立党の金九であったが、大倭教はその背後支援団体の役割を果たした。

1945年の祖国解放後、米国の支援を受けた李承晩は、左派勢力に対抗するために、上海臨時政府の正当性を継承し民族の主体性を確立するという名目で、帰還した臨政幹部たちを勢力圏に取り込んだ。そのために、李承晩が初代大統領に就任した大韓民国の建国内閣には、李始栄副大統領をはじめ、李範奭（国務総理）・安浩相（文教部長官）・明濟世（審計院長）・鄭寅普（監察委員長）・申性模（国防部長官）など多数の大倭教徒が参画した。こうして、「弘益人間」の建国理念が定められ、紀元前2333年を基準とする「檀紀」が国会で正式に採択され、「開天節」が国民の祝日に定められた。

また、大倭教は解放後に各種教育機関の設立を行った。弘益大学はもともと大倭教徒たちが財産を寄附して設立した大倭教の教育機関であった。国学大学、慶熙大学、檀国大学などの創設にも大倭教徒が深く関わったとされる。

その後、大倭教は教団後継者の育成に失敗し、また、解放後に急成長したキリスト教勢

力の批判を受け、急速に規模を縮小させていった。しかし、大倭教を中心に確立された檀君ナショナリズムは、南北分断の対立を克服するための統一理念として、大韓民国の保守派民族主義者たちに継承されていった。

1980年代以降、韓国では、精神世界社から刊行された小説『丹』がベストセラーになるなど、「檀君」に関する復古運動が再燃した。また、国仙道や丹学仙院など丹田呼吸法普及団体が檀君思想を積極的に取り入れた。現在最大規模の丹学修練団体である丹ワールド（もと丹学仙院）では、韓国の丹学修練法が檀君によってもたらされたと主張し、最近では平和大学院大学や國學院という研究機関を設立して、檀君宣揚運動を展開している。民主化運動の英雄である金芝河も、一時期この団体と関与し、率呂運動という名の檀君宣揚運動を展開した。

21世紀に入り、中国では『東北工程』という国家的プロジェクトが遂行された。この『東北工程』では、高句麗や渤海など中国東北地方で活動したすべての部族の歴史を中国史と見なす研究が行われた。この『東北工程』に対して、韓国では官民あげての反対運動が巻き起こった。2006年から2007年にかけて、『朱蒙』『淵蓋蘇文』『大祚榮』『太王四神記』（ペ・ヨンジュン主演）など、高句麗をテーマとした韓国ドラマが争って制作されたが、これは高句麗や渤海の歴史がまぎれもない韓国史であることを国内外に広く宣伝するためのものであり、その基本モチーフは大倭教流の檀君ナショナリズムにもとづくものであった。植民地朝鮮において日本帝国主義に対抗するために創出された檀君民族主義史観が、現代における中韓の歴史認識摩擦の中で、韓国文化ナショナリズムの核として甦ったのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

佐々充昭、(巻頭言)「大国化する中国と日韓学術交流の未来」、『日本思想史研究会会報』第25号、1~9頁、2008年、査読無

佐々充昭、「戦前期の大本教と道院・世界紅卍字会との連合運動に関する研究」(韓国語)、『世界新宗教国際学術大会編「東亜社会変革と新宗教」報告論文集』、45~56頁、2006年、査読有

佐々充昭、「東アジア近代におけるウエスタン・インパクトと国教創設運動」、『アジア民衆史研究：東アジアにおける民衆の世界観5 - ウエスタン・インパクトはいかに語られたか』第11集、39~53頁、2006年、査読有〔学会発表〕(計5件)

佐々充昭、「朝鮮近代における国教創設運動の展開 - 儒教型教団から檀君教の創設へ」、『朝鮮史』研究会、第4回研究報告会、

2008年12月19日、立命館大学

佐々充昭、「植民地朝鮮における檀君系教団の分裂・提携・統合運動に関する研究」、『国際研究集会2007見る・学ぶ・暮らす - 比較植民地学の樹立を目指して、第1部ワークショップ「植民地朝鮮の文化」』、2007年12月15日、九州大学韓国研究センター

佐々充昭、「東アジア近代における国教創設運動と日鮮同祖論 - 『檀君即素盞鳴尊』説を中心に」、『天変地異の社会学』研究会(北京師範大学周柱鈿教授<国際儒学院副院長・中華孔子学会副会長>との合同研究会)、2007年9月21日、北京師範大学(中国)

佐々充昭、「戦前期の大本教と道院・世界紅卍字会の連合運動に関する研究」(韓国語)、『世界新宗教国際学術大会「東亜社会変革と新宗教」(北京大学国際東亞研究中心、北京大学宗教研究所、韓国新宗教学会による共同主催)、2006年8月12日、北京大学(中国)

佐々充昭、「近代東アジアにおける国教創設運動の展開 - 韓末における儒教革新団体から檀君教の創設へ」、『アジア民衆史研究会第二回シンポジウム』、2006年1月14日、早稲田大学

〔図書〕(計3件)

佐々充昭「韓国高句麗ドラマに甦る日本植民地期の『大朝鮮主義史観』」、木村一信・崔在喆編『韓流百年の日本語・日本語文学論』、人文書院、2009年発行予定、共著

佐々充昭、「申圭植の宗教思想と民族独立運動 - ディアスポラ空間における宗教性の表出」、『倍達民族の歴史意識と思想家たち(韓国学報告書)』、ハンブリ社・韓国ソウル、2008年、297~340頁、共著

佐々充昭、「1920年代満州における『大高麗国』建国構想 - 韓国民族宗教と日本アジア主義者との邂逅 - 」(韓国語)、『ソウル大学校宗教問題研究所編『宗教と歴史』ソウル大学校出版会・韓国ソウル、2006年、325~355頁、共著

## 6. 研究組織

- (1)研究代表者：佐々 充昭 (SASSA MITSUAKI)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：50411137
- (2)研究分担者
- (3)連携研究者